

## 子どもたちの生き方としての進路指導及びキャリア教育についての考察

村井万寿夫（北陸学院大学）

子どもたちが育つ社会環境は大きく変化しており、産業・経済の構造、地球規模の自然環境、国際平和についても同様である。このような中で生きる子どもたちの将来の捉え方も変わってきており、自らの将来に向けての夢を描くことも以前に比べて容易ではなくなっている。このような問題意識のもと、学校で行われている進路指導及びキャリア教育について考察した。結果、幼児期から将来の夢を持つ子どもがいることを示唆した。また、中学校では夢を持つことよりも高校選択に意識が向いていること及びキャリア教育と進路指導の架け橋となる職場体験についての重要性について指摘した。

生き方 将来の夢 進路指導 キャリア教育 職場体験

## 1. はじめに

子どもたちが育つ社会環境は大きく変化している。新型コロナウイルス感染症の収束が未だ見えないことから、社会生活や産業・経済の構造が大きく変わってきている。また、地球規模の自然環境の変化、国際平和の在り方についても変わってきていることから、子どもたちの将来の捉え方も変わってきている。自らの将来に向けての夢を描くことも以前に比べて容易ではなくなっている。

このような問題意識のもと、子どもたちの生き方に影響する進路指導及びキャリア教育について考察する。

## 2. 幼児期の経験

子どもたちは幼稚園、保育園の頃から徐々に夢や目標を持つようになる。それは保護者、教育者、保育者とのかかわりの中で生まれたり、絵本、テレビ、自然体験など様々な環境の中からも生まれたりする。

尾島・杉山（2014）による大学生64名対象の「今の私が完成されるまで」のエピソード分析において、35名の学生が現在の自分につながる経験を幼児期にしていると指摘している。夢や目標は幼児期から一人一人の子どもの生き方に大きくかかわってくると言える。

筆者が2008年から2015年にかけて金沢市

内大学生（教員志望）244名を対象に調査を行った結果を表1に示す。

表1 「いつ夢を持ち始めたか」の回答結果

n=244

幼・保	小学校	中学校	高校	大学
6.5%	23.3%	22.9%	37.5%	9.8%

各学校比に対して高い割合ではないが、幼稚園・保育園の子どもたちも夢を持ち始めることを示唆している。野口（2011）によると、将来の夢について家族で話し合う機会のない家庭が24%程あったと報告している。幼児期からいろいろな機会将来の夢について話し合うことが大切である。もちろん、小学校、中学校へと進むに連れて夢が変わっていくこともある。また、夢としてではなく現実的な目標へと移っていくことも多いと考えられる。

表1を基にすれば、現実的な目標へと移るのは高校のときであると言える。高校では「将来」が近づき、どんな仕事に就くか、そのための進路選択が迫ってくる。また、中学校の割合が比較的低い値を示していることから、将来どんな仕事に就きたいかということよりもどの高校に行くか、どの高校なら行けるのか、いわゆる高校選択に意識が向かうため、夢を持つ割合が高くない傾向にあると考えることができる。

このように考えると、中学校、高校における生徒一人一人の生き方にかかわる進路指導は、当然のことながらとても重要であると言える。

### 3. 進路指導と学業成績

進路指導とは、生徒が自ら、将来の進路選択・計画を行い、就職又は進学をして、さらには将来の進路を適切に選択・決定していくための能力をはぐくむため、学校全体として組織的・体系的に取り組む教育活動である（文部科学省2010）。筆者の中高校生の経験をもとに言えば、進学するか就職するか、進学するとしたらどの学校に行くかについての指導と言える。筆者の中高校生の頃は学業成績が進路決定に大きな影響を及ぼしていた。

学業成績が子どもたちの進路に大きな影響を及ぼすようになったのは、我が国の高度成長期と大きく関係している。松田（2012）は1960年から70年代にかけての進路指導について、「高度成長期の社会変動によって、「進路指導」は学校教育、とりわけ中等教育にとって避けられない課題となっていった」とし、「高校進学率の上昇と共に、「学校経由の就職」、あるいは学校歴を重視した企業の採用行動が普及することで、子どもたちの進路形成に対する学校の規定力が強まった」と指摘している。

この時期、筆者も進路指導を受けているが、中学校から高校に、高校から大学に進学する際、どこの高校、大学に行くか、学業成績が基本となっていた。

### 4. 進路指導とキャリア教育

前項で述べたように進路指導は主に中高校生が対象となり、進路指導は生徒一人一人の将来の生き方や人生設計までを含めた内容となる。したがって、将来どう生きるか、どんな人生設計を立てるか、そしてそのためにどんな知識や技術を身に付ける必要があるかについて生徒と話し合う必要がある。その過程で設定するのが進学希望高校であると言える。つまり、学業成績よりも生き方や人生設計に重きを置

いた進路指導が重要である。このように考えるとキャリア教育は「生き方や人生設計」に関する教育と言える。

中央教育審議会答申（2011）では「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（以下「答申2011」と称す）において、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義している。これは1999年以降、キャリア教育の定義は若干の変容を伴いつつ今日に至っているとして再定義したものである。

2011年1月の答申を受け、文部科学省は同年6月に「キャリア教育とは」を公表した。この中では、学校における教育活動が、ともすれば「生きること」や「働くこと」と疎遠になったり、十分な取組が行われてこなかったりしたのではないかとの指摘を踏まえ、2004年1月に「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」を発表したことについて触れている。そして、ここで登場する「勤労観」や「職業観」を育てることを端的にキャリア教育と称するようになった。

### 5. 生き方・キャリア教育・進路指導の枠組

これまでに述べたことを整理すると、「生徒一人一人の生き方を共に考え、それに向かうためのキャリア教育を行いながら、個に対応した進路指導を行う」と言うことができるだろう。そして、このことを図で表すると次のようなものになると考える（図1）。

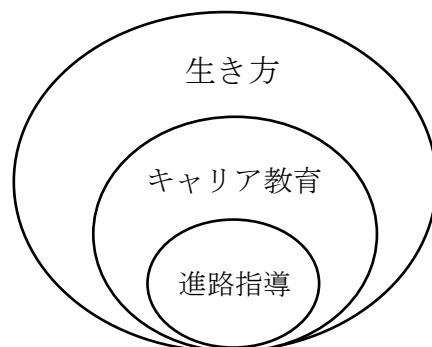


図1 生き方・キャリア教育・進路指導の枠組

## 6. キャリア教育と進路指導の架け橋

中学校学習指導要領解説特別活動編（2017）では進路指導の一環としての職場体験について次のように示している。「職場体験活動を通して働く人の思いに触れて自分の勤労観・職業観を高めること、キャリア形成に関する自分自身の意思決定の過程において他者や教師との対話を通して自己の考えを発展させること」。

このことから職場体験は、キャリア教育と進路指導の「架け橋」だと言える。そこで、筆者独自に教職課程で学ぶ大学生 54 名を対象に中学校 2 年生の時の職場体験について、質問紙による聞き取りを行った（表 2）。

表 2 体験した職場と人数

体験した職場の種類	人数
教育施設（幼稚園・保育園・児童館）	18
食料販売施設（スーパーマーケット）	14
介護施設（デイサービスセンター）	5
スポーツ関連施設（体育館）	4
文化施設（図書館）	3
大型商業施設（ホームセンター）	3
宿泊施設（ホテル）	2
美容施設（美容院）	2
医療施設（病院）	2
陸上自衛隊（金沢駐屯地）	1

表 2 から、対象学生の 33%が教育施設での職場体験を経験しており、現在の子ども教育系の学科での学びにつながっていることが分かる。また、この 33%には含まれない学生の中には、教育施設を希望したが別の施設になったと答える学生もいた。

大久保（2017）は、保育系短大生 26 名を対象に「職場体験は保育系進学のかきかけになったか」について質問紙調査を行い、実際に保育体験を行った学生の 94.1%（17 名中 16 名）が保育系進学のかきかけになったことについて報告している。

このことから中学 2 年生で行う職場体験

は、可能な限り生徒の第一希望をもとにした施設配属が望ましいと言える。

## 7. 小学生における職業意識の芽生え

小学生になると社会や自然のことなど、多様な学習を通して職業意識が芽生えてくる。これに関して加藤・内藤（1991）は早くから次の点を指摘している。「職業における自己実現の要求などが生まれ、あるいは高まっていく過程には、児童・生徒の日常生活世界において形成される親の働く姿や職業への熟知（認識や理解）の程度が少なからず影響を及ぼしているといえる」。

このことは現在においても当てはまる。小学生のうちから親がどのような仕事をしているのか知ることによって子どもの職業意識が芽生え、これを契機に他の職業にも興味を持つようになる。このような意識のもと、さまざま職業について知ったり調べたりする活動をカリキュラム・マネジメントの観点から計画・実施することが求められる。

## 8. おわりに

子どもたちの生き方にかかわるのは保護者、教育者、保育者が中心になる。幼児期においては保護者や保育者のかかわりが大きい。

一方、児童期以降は教育者のかかわりが大きくなる。そこで重要なのは子どもと共に生き方を考え、それに向かうためのキャリア教育と進路指導である。この際、中学校 2 年生で行う職場体験が将来のキャリア形成につながるように計画・実施することである。

その基礎となるのが児童期における職業意識の芽生えであり、それを誘発させる学校教育環境が必要である。これにより子ども一人一人のキャリア発達に期待できる。

キャリア発達とは、答申 2011 において「自分らしい生き方を実現していく過程」と示していることから、子どもたちの発達段階に応じたキャリア教育と進路指導を行うことが重要である。

## 参考文献

- 尾島重明・杉山佳菜子（2014）「キャリア教育をどう進めるかⅠー大学生レポートによる回想と評価ー」, 太成学院大学紀要第16巻, pp. 101-112
- 大久保義美（2017）「職場体験と保育系短大生ー体験は進路選択に影響するが, 現実は厳しかったー」, 日本教育心理学会第59回総会発論文集, p. 176
- 加藤守弘・内藤勇次（1991）「児童・生徒の進路発達に関する研究（1）ー進路成熟及び勤労観における親の影響についてー」, 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, pp. 431-432
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書（2004）「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」
- 中央教育審議会答申（2011）「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」
- 野口桂子（2011）「深芝小学校におけるキャリア教育」, 日本教育心理学会「準備委員会シンポジウム3」, 教育心理学年報, pp. 23-24
- 松田洋介（2012）「戦後民間教育運動における進路指導問題の構造とその変容ー1960-70年代における全国進路指導研究会の展開に焦点をあててー」, 日本教育学会第71回大会一般研究発表, pp. 314-315
- 文部科学省（2010）「生徒指導提要」, p. 4  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1404008.htm)(参照日 2021. 6. 14)
- 文部科学省（2011）「キャリア教育とは」  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1306818\\_04.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2011/06/16/1306818_04.pdf)(参照日 2021. 7. 5)
- 文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説 特別活動編」